

クルグズスタンにおける国家意識

—マナス英雄叙事詩と国家性 2200 年を中心に—

中西 健

日本大学大学院総合社会情報研究科

National Consciousness in Kyrgyzstan

—Focusing on the “Manas Epic” and the “Statehood 2200” of Kyrgyzstan—

NAKANISHI Ken

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The first President of Kyrgyzstan A.Akaev tried to exploit the Manas Epic in order to unite the new nation. The Manas Epic, the longest epic in the world, is the most important component of the ethnic Kyrgyz's pride as well as the title “the most ancient ethnicity in the Central Asia” given by an academic V. Vartol'd, an academician of the Academy of Sciences USSR.

There exists the ethnical and territorial rift between the ancient and contemporary Kyrgyz. The former President endeavored to “graft” the one on the other by manipulating the historic facts. It is often considered as the counterfeit of the history for the political use which followed the Soviet way. In comparison to the other leader of the Central Asia, however, Akaev's manipulation of the history is rather innocent. He induced democracy from the Epic as one of the national concept and this seems to be not far from reality, considering the circumstances the ethnic Kyrgyz who were outnumbered by the surrounding the nomadic and dynastic groups and always stuck together for defending.

The problem is, however, that this unity depended on each tribal unit, not national. He faced the rift between his ideals and the realities. The realities are the artificial character of the nation, the tribal and regional cleavage, the loose bondage of the political elites, and the dependence to Russia which had given the legitimacy to the Kyrgyz nation and statehood.

はじめに

クルグズ共和国（以下、クルグズスタン⁽¹⁾）は、中央アジア 5 カ国のひとつであり、5 カ国のうちで面積・人口ともに 2 番目に小さい（面積ではタジキスタンが、人口ではトルクメニスタンが最小である）。

クルグズスタンは、同国人口の約 7 割を占めるクルグズ人の他、南部に集住し同国第 2 位の人口（約 14%）を有するウズベク人、北部の都市部を中心に

居住するロシア人（約 9%）、さらにドゥンガン人（中国系ムスリム）などからなる多民族国家である。

また、地理的に南北をフェルガナ山系が隔てており、南北間の交流は歴史的に少なかった。

B.アンダーソンは、すべての共同体は想像されたものであるとの前提で、国民国家は一種の文化的な人工物であり、国民とナショナリズムはイデオロギーというよりも、宗教または親族の範疇であるとする⁽²⁾。共同体としての国民は、宗教共同体に似た、見知らぬ間柄における連帯感、親族にも似た愛着を持つようになる。

(1) 同国では、1993 年に国名がクルグズスタン共和国からクルグズ共和国へ変更されたが、憲法ではクルグズ共和国とクルグズスタンが並存している。なお、本稿で「クルグズ人」という場合には民族としてのクルグズ人を指し、国民を指す「クルグズスタン人」と区別する。

(2) Benedict, Anderson, *Imagined Communities*, London and New York: Verso, 2006, pp.4-7.

ペレストロイカ期から独立後の中央アジアにおいて、民族的英雄や民族文化への再評価の動きが高まった。

ウズベキスタンはティムールとティムール朝に、タジキスタンはサーマーン朝の栄光に、国家の起源を求めた。民族文化では、ウズベキスタンの英雄叙事詩「アルパミシュ」が国威発揚に利用され、同じような現象がクルグズスタンにおいても見られた。

世界最長の英雄叙事詩「マナス英雄叙事詩」とクルグズ人の「民族としての歴史の古さ」は、クルグズ人の民族的矜持を支えている。前記アルパミシュがカザフ人やカラカルパク人など中央ユーラシアのトルコ系諸民族に共有されているのに対して、マナス英雄叙事詩は、クルグズ人特有のものである。

クルグズスタンでは、1995 年に、「マナス英雄叙事詩 1000 年祭」が行われた。また、2003 年を「クルグズスタン国家性⁽³⁾2200 年記念年」と決定された。しかしながら、「1000 年」や「2200 年」といった数字には、科学的な根拠はない。

ロシアの東洋学者で科学アカデミー会員の V.バルトリド (1869—1930) の以下の言説は、政治家・知識人だけでなく、一般のクルグズ人にも広く知られている：

クルグズ人は、中央アジアの古代民族にあって最古のものに属する。現在の中央アジアに住む諸民族の中で、かくも早くにその名が歴史に現れたものは、管見の限り、ひとつもない⁽⁴⁾。

しかし、バルトリドは、古代クルグズ人（エニセイ・クルグズ人）と現代クルグズ人の連続性を認めたわけではない。

同国の初代大統領 A.アカエフ（1990—2005 年在任）は、マナス英雄叙事詩に拠って、クルグズ人の統一と団結、多民族国家の国民統合理念、民主主義を導出している。

本稿では、新独立国家クルグズスタンにおける国家意識について考察する。まず、クルグズ人の歴史を概観した後、マナス英雄叙事詩そのものの内容と特徴を示す。次に、同叙事詩の帝政ロシア・ソ連時代における処遇を概観、次いで、マナス英雄叙事詩と国家性 2200 年に関するアカエフの言説・解釈に注目して、アカエフの国家観、民族観を探り、最後に、理念と現実の乖離を示したい。

1 クルグズ人の歴史

クルグズ人が強国を形成した史実はない⁽⁵⁾。また、実在の英雄は部族単位の英雄であり、実在の民族的英雄を欠いている。

さらに、クルグズ人の歴史には「断絶」が存在する。すなわち、南シベリアにおいてバルス・ベク、アルプ・ソルなどの実在の英雄を有した古代のエニセイ・クルグズ人と現代の中央アジアのクルグズ人との間には民族的にも地理的にも乖離がある。

クルグズスタン国家は人工的ともいえる。1920—1936 年に行われたソ連による境界画定が現在の旧

(3) 英語へは statehood（独立国家であること/その要件）と訳されるが、ニュアンスは異なる。国家の要件は、領土・住民・政府・独立性である。他方、国家性

（gosudarstvennost'）とは、独立国家（主権国家）のみならず、その前段階であったソ連内の共和国、自治共和国、さらに古代にまで遡る「国家的なもの」をも意味する。旧ソ連の政治学関連の著作において多用される用語である。

(4) Vartol'd, Vasilii, *Izbrannye trudy po istorii kyrgyzov i Kyrgyzstana*, Bishkek, 1996, p.176. なお、「民族」は原文では narod である。帝政ロシア時代にポーランド語経由でロシア語に natsiia の語が入ったが、ロシア語では専ら「民族」の意で用いられる。narod は、「国民」、「民衆・人民 (people)」とも訳されるが、氏族 (rod)・部族 (plemia) の上位概念であるため、ここでは「民族」と訳した。

(5) クルグズ人の学者は、エニセイ・クルグズ人がウイグル帝国を崩壊させた後の数十年を「クルグズスタンの大国時代」と呼ぶが、実際に広大な領土を統治した事実はない。他方、現在のクルグズスタンの領域において、西突厥、カラ・ハン朝、西遼（カラキタイ）などの帝国の首都が置かれた。しかし、西突厥、西遼はクルグズ人の敵であった。カラ・ハン朝の大侍従ユスブ・バラサグンはクルグズスタン紙幣の最高単位 1000 ソムの肖像画となっている。これは、バラサグンがカラ・ハン朝の首都バラサグン（現在のクルグズスタン領）で生まれたことを根拠としているが、他方で、彼は副都カシュガルで宮廷人として仕えたことから中国新疆ウイグル自治区のウイグル人の中では民族的英雄として見なされている。なお、ユスブ・バラサグンは、アラビア文字で書かれたテュルク語（カラ・ハン朝テュルク語）による最古の文学作品（君主への道徳指南書）『クタドゥグ・ビリグ』を著したことで有名である。

ソ連中央アジア5カ国の国境の基となっているが、境界画定作業当初にモスクワ（ソ連中央）はクルグズ人の共和国を設置する予定ではなかった。境界画定は、民族の分布、分割統治などを加味して行われたとされる。Io.スターリンが示した民族の要件は、歴史的に形成された共通の(1)言語、(2)領土、(3)経済、(4)心理であり、全要件を満たしたものに民族が与えられ⁽⁶⁾、共和国または自治共和国が設置された。境界画定期に、クルグズ人の行政単位は、自治州（1924年）、自治共和国（1926年）、共和国（1936年）と格上げされる。

ソ連時代における政策決定は、モスクワの意に拠った。副次的に、民族意識に目覚めたクルグズ人政治エリートによるモスクワへの積極的な働きかけもクルグズスタンの国家性の基礎の確立に貢献したが、いずれにせよ、クルグズスタンに共和国を与えたのはモスクワである。

このように、実在する民族的英雄の欠如、強国としての歴史の欠如、人工国家性などが、クルグズスタンの特徴といえる。以下、クルグズ人の歴史を古代に遡って概観する。

モンゴル高原の西北端、南シベリアのエニセイ河流域において、「黄毛、緑眼、高身長」を特徴とする⁽⁷⁾クルグズ人（エニセイ・クルグズ人）の存在を最初に「堅昆」として伝えたのは司馬遷の『史記』である。前記「クルグズスタン国家性2000年」は、この史実を根拠とする。

以後、漢語文献において表記を変えながらクルグズ人の存在が知られる。前漢の将軍として匈奴に捕らわれた後に匈奴の右校王となる李陵は、エニセイ・クルグズ人を統治することとなる。クルグズ人のうちで黒髪のもは李陵とその兵士の末裔と信じ

られていると『新唐書』に記されている⁽⁸⁾。

6世紀中葉、突厥（テュルク）帝国が成立するとクルグズ人はその傘下に入る。続いて、ウイグル帝国の属国となるが、9世紀前半のウイグル帝国の不安定化に乗じて同帝国を瓦解させた。10世紀の漢語文献によれば、クルグズ人は30万の兵士、30万頭の馬を有したことからして強力な軍事集団であった⁽⁹⁾。その後、クルグズ人は、モンゴル高原の覇者となることはなかったが、ウイグル人の中央アジアへの移住と中央アジアのトルコ化進行の契機を作った。

時代が下ると、西方のイスラーム世界の諸文献もエニセイ河流域におけるクルグズ人の存在を「ヘルヘズ」、「フルフズ」、「ヒルヒズ」として報せる。11世紀半ばにペルシャ人の歴史家によって、「ヒルヒズ人は、誰とも関係を持たず、他者の言語を知らないし、他者も彼らの言語を解さない」、「旅行者に食事を供さない。彼らに遭遇したら（旅行者は）逃げるだけだ」、「彼らの数は少ない」と記されるように⁽¹⁰⁾、ウイグル帝国を崩壊させた後のクルグズ人は、故地に戻り、雪山・森林によって遮断された空間で暮らしていた様子が伺える。

遼帝国の圧迫を受けて、故地エニセイ河流域・アルタイ山脈から天山山脈、中央アジア方面への移動が始まる。

16世紀のムハンマド・ハイダール・ムルザーの『タリーヒー・ラシーディー』はモゴリスタンにおけるクルグズ人を語る重要な文献である。同書において「15世紀初頭、クルグズ人のために、モゴリスタンのモンゴル人は一時いなくなった⁽¹¹⁾」とある。ムハンマド・クルグズを首領とするクルグズ人は、分裂したモンゴル帝国の政争において立ち回った。

このように、クルグズ人はユーラシアにおいて強

(6) スターリン全集刊行会『スターリン全集第二巻』（大月書店、1955年）325—330頁。

(7) 現代クルグズ人は、中央アジアの諸民族にあって最もモンゴロイド的形質が色濃い（Glavnaia redaktsiia Kirgizskoi Sovetskoi Entsiklopedii, *Kirgizskaia SSR*, Frunze, 1982, p.112.）。もっとも、形質には個人差があり、黄毛・緑眼のものも散見される。クルグズ人は、自分たちは本来コーカソイドだったが、モンゴル人との混交によって現在のようなモンゴロイド的形質が濃くなったと信ずる者が多い。

(8) Dzhumanaliev, T., *Khrestomatiia po srednevekovoi istorii Kyrgyzstana*, Tom1, Sin' Tan Shu, Bishkek: Altyn Tamga, 2007, p.338.

(9) Dzhumanaliev, T., *Khrestomatiia po srednevekovoi istorii Kyrgyzstana*, Tom1, Taipin Khuan' iui tsi, Bishkek: Altyn Tamga, 2007, p.334.

(10) Dzhumanaliev, T., *Khrestomatiia po srednevekovoi istorii Kyrgyzstana*, Tom1, Zain Al-Akhbar, Bishkek: Altyn Tamga, 2007, pp.405-406.

(11) Dzhumanaliev, T., *Khrestomatiia po srednevekovoi istorii Kyrgyzstana*, Tom2, Tarikh-i Rashidi, Bishkek: Altyn Tamga, 2007, p.466.

国となった時代は皆無であるが、ユーラシアの歴史の重要な転機に関与してきた。

16 世紀後半には、現在のクルグズスタン北部のクルグズと南部のトグズ・ウールの存在が知られた⁽¹²⁾。18 世紀初頭のモンゴル系オイラト人による征西、さらに 18 世紀中庸の清によるオイラト人征伐の玉突き現象により、クルグズ人の南部への移動は加速した。

北部の有力部族はサルバグシュ、ソルト、サヤク、ブグ、チェリク等だった。19 世紀初頭からサルバグシュの北部での覇権傾向が見られ、その長オルモンはハン（王）を宣言した。しかし、有力部族間の抗争が激化し、いくつかの部族は帝政ロシアに庇護を求めた。

他方、南部の有力部族は、アディギネ、ムングシュ（モングシュ）、また、早くから定住傾向を示したイチキリク部族の下位集団クプチャク、テイト、ナイマン等であった。これらの部族は、コーカンド・ハン国の宮廷政治において競合した。

19 世紀中頃、ウズベク人を主体としフェルガナを本拠とするコーカンド・ハン国によって、現在のクルグズスタン全域が征服され、クルグズ人に対して厳しい課税が行われた⁽¹³⁾。以降、クルグズ人による抵抗運動が繰り返された。

19 世紀後半に、帝政ロシアがコーカンド・ハン国を征服すると、クルグズ人は独立の動きを見せるが、半ば自発的に帝政ロシアに編入されることになった。これは、一面ではコーカンド・ハン国からの解放を意味した。

2 マナス英雄叙事詩

クルグズ人の間には部族ごとに多くの口頭伝承の英雄叙事詩が存在するが、クルグズ人全体のもの、そして最大のものがマナス英雄叙事詩である。

マナス英雄叙事詩は、クルグズ人の伝説の英雄マ

ナスとその遺志を受け継いだ息子セメテイ・孫セイテクが、キタイ人（クルグズ語では「クタイ」）やカルマク人からの侵略に抗して勝利するというのが主題である。キタイ人は、漢人あるいはモンゴル系契丹人を指す。カルマク人とは、西モンゴル人すなわちオイラト人を指す。

マナス英雄叙事詩の存在が最初に記されたのは 16 世紀にペルシャ人により書かれた『マジム・アト・タヴァリフ』である。しかし、叙事詩の成立時期については、定説が存在しない。もともと、口頭伝承の性格から、内容は時代とともに変化してきたといえる。例えば、異教徒（仏教徒）のキタイ人やカルマク人に対する「イスラームの守護者」としてのマナス像は後世に付加されたものと考えられる。

英雄マナスが誰を指すのかについても定説はない。匈奴の右校王として中国（漢）と戦った李陵説、突厥帝国と戦い戦死したバルス・ベクとする説、ウイグル帝国を崩壊させた後の英雄アルプ・ソルとする説など、時代ごとの英雄をマナスに比定している。

マナス英雄叙事詩の特徴として 5 万詩行を超える長大さの他に、他の中央アジア・内陸アジアにおける英雄叙事詩に見られないものとして、主人公である英雄マナスが戦死するという悲劇性が挙げられる⁽¹⁴⁾。また、クルグズ人の中では、子が生まれる際や病気治癒のためにマナスが謡われることがあり、子にはマナスの名を付けない慣わしがあった⁽¹⁵⁾。

マナス叙事詩は、19 世紀に Ch.ワリハノフ、V.ラドロフらによって調査、文字に記録され始めたが、刊行物として一般の人々の手に渡るのはペレストロイカ期を待たねばならなかった。1925 年に、刊行の動きがあったが、主導者は粛清された。他方で、大祖国戦争（第二次世界大戦）では戦意鼓舞のために利用された。

戦後、クルグズ人初の共和国共産党中央委員会第

(12) Asanov, T., “Kyrgyzdardyn etnosaiasii tüzülüşünün dzhana sotsialdyk uumdashuu maselelerinin sandzhyrada chagylgyryshy”, Voprosy istorii Kyrgyzstana, No.1, 2007, p.12.

(13) Dzhushupbekov, A., “Osobennosti regional'nogo urovnia etnicheskoi identichnosti”, Voprosy istorii Kyrgyzstana, No.2, 2006, p.110.

(14) 若松寛『マナス壮年編 キルギス英雄叙事詩』、平凡社、2005 年、392—393 頁。マナスはキタイ人との戦いで敵将コングルバイによって致命傷を得る。なお、中国のクルグズ人のマナスチュ（マナス英雄叙事詩の詠み手）ママイによるものでは、コングルバイはキタイ人ではなくカルマク人ということになっている。

(15) Karypkulov, A., Manas Entsikolopediia Tom2, Bishkek: Akyl, 1995, pp.72,79.

一書記I.ラザコフ時代の1951年にマナス英雄叙事詩に関する学術会議が催される。しかし、その後は、汎イスラーム主義、汎トルコ主義のレッテルを張られタブー視されるようになった。マナスの宿敵のひとつのキタイが中国および中国人を想定することから、1949年に成立した中華人民共和国との関係もマナス英雄叙事詩が忌避された一因と考えられる⁽¹⁶⁾。

3 独立後におけるマナス英雄叙事詩

ペレストロイカ期にマナス英雄叙事詩は復権し、独立後は国際空港や首都ビシケクの目抜き通り、大学にマナスの名が冠せられる(クルグズ「マナス」大学)、国立音楽堂前の広場にマナス像が建てられるなど、新独立国家クルグズスタンの統合のシンボルとしての役割を果たした。クルグズスタン独立後の新通貨500ソム札に描かれているのはマナス英雄叙事詩の語り手(マナスチュ)のサヤクバイ・カララ・ウールである。

「国家性2200年」について、アカエフが、クルグズ人の歴史的断絶をどう克服しようとしているかは自著『クルグズスタンの国家性と国民的叙事詩マナス』(2004年)において窺われる。

アカエフは、「定説とはいえない」としながらもN.ビチュリンのクルグズ人の天山山脈土着説を擁護する⁽¹⁷⁾。同説によれば、天山山脈から南シベリア方面に移住し、再び天山山脈に移住する。

わが国の東洋学者である松田壽夫(1903—82)が指摘した、「草原の道」とその北を通る「森林の道」との通商関係とエニセイ・クルグズ人の関与は考古学的にも文献においても証明されていることから⁽¹⁸⁾、南シベリアのエニセイ・クルグズ人と天山山脈周辺の住民との交易関係があったことは確かである。

他方、アカエフは、クルグズ人の天山山脈への移住の流れにおいて、17世紀のロシアによる南シベリアの征服によるクルグズ人の移動が最も大規模な移住を促したとする⁽¹⁹⁾。これは、南シベリア、エニセイ

の要素を強調するものである。

アカエフは、マナス英雄叙事詩から「7つの教訓」を抽出し、この7つの教訓は、初等・中等学校において独立後の若い世代に教えられてきた。その内容は次の通りである⁽²⁰⁾。

- (1) 統一と団結
- (2) 民族間の融和・友好・協力
- (3) 民族としての尊厳と愛国心
- (4) 労働と教育は発展と福祉への道
- (5) 人道・寛容・忍耐
- (6) 環境との調和
- (7) 国家性の強化と防衛

第1の教訓は、英雄叙事詩の主要なモチーフである。周囲を敵に囲まれて常に戦闘に晒されたクルグズ人は、他の中央アジアの諸民族に比べ、民族意識が高かったことをV.ラドロフ(1837—1918)は指摘している。アカエフは、団結の基礎は「軍事民主主義」にあったとする。軍事民主主義とは、遊牧民＝兵士の間の平等と、遊牧民の伝統的「民主的」意思決定機関クリルタイ⁽²¹⁾を内容とする。モンゴル帝国とその継承国家が世襲的・王朝的性格を強めていく一方、小規模集団のクルグズ人においては、クリルタイが重要な位置を占めたと考えられる。

第2の教訓である「民族間の融和・友好・協力」において、アカエフは、マナスの盟友がキタイ人のアルムムベト(スーシューヤー)⁽²²⁾であったことを

epos Manas, Bishkek: Raritet, 2004, p.33.

(20) Ibid., pp.239-241.

(21) クルグズ語では「クルルタイ」。氏族長が集まって、部族長や重要課題の決定を行う場として、クリルタイはトルコ・モンゴル系の遊牧集団に広く見られた。「国会」とも訳されることがある(例えば、間野英二・堀川徹『中央アジアの歴史・社会・文化』、日本放送出版協会、2004年、131頁)。生活環境の厳しい遊牧にあって、指導者の資質は個人および集団の運命を決定づけるものであった。したがって、このような合議制の機関が要請されたと考えられる。独立後のクルグズスタンでは1994年に「第一回クルルタイ」で諸民族総会(Assamleia Narodov Kyrgyzstana)が創設され、4年ごとに国民クルルタイが行われる。また、政党の党大会もクルルタイと呼ばれることがある。さらに、非公式なクルルタイが開かれることもある。例えば、アカエフ政権崩壊に至る反体制運動の過程で、同国南部ジャラルバト州とオシュ州でクルルタイが開かれ、それぞれ知事が選出された。

(22) マナス配下の40勇士(盟友)の筆頭。キタイ人の皇

(16) Akaev, Askar, *Kyrgyzskaiia gosudarstvennost' i narodnyi epos Manas*, Bishkek: Raritet, 2004, p.131.

(17) Ibid., p.20.

(18) 江上波夫編『中央アジア史』(山川出版社、1990年)187—188頁。

(19) Akaev, Askar, *Kyrgyzskaiia gosudarstvennost' i narodnyi*

強調している。

これら2つの教訓は、民族文化の「捏造」しての政治利用とはいえないだろう。

以降の教訓は、補足的・派生的なものであり、第4の教訓と第6の教訓のみに拡大解釈あるいは「捏造」の嫌いがある。

「マナス英雄叙事詩 1000 年祭」が行われた 1995 年の政府系新聞『タリシケク』における「偉大な英雄の国家」と題する記事をアカエフはその著書『クルグズスタンの国家性と国民的英雄叙事詩マナス』(2004 年)の中で引用している⁽²³⁾：

民族叙事詩のおかげで世界の政治地図に出現した国家があるだろうか。ソ連第三回大会における Iu.アブドゥラフマノフの構想は、ウスク湖からアラル海まで跨るクルグズーカラカルパク自治共和国の設置で、首都をジャララバトに置くというものであった。党の幹部は反対する。「クルグズ人とカラカルパク人の居住地は離れている。別個の自治区域を作らなければならない」。「クルグズ人について『われわれ意識』の他に統一性はあるだろうか考えなければならない」。そこで、アブドゥラフマノフに伝説の王が助けに現れた。「われわれをマナスが統合している」。ピシベク郡でもカラコル郡でもオシュ郡でもマナスは語られている。アブドゥラフマノフは、他の要素、経済、社会政治、歴史的根拠も示したが、決定的だったのは英雄叙事詩であった。

クルグズスタンの国家性は、ソ連による境界画定と共和国の設置が基礎となった。そこにおいて、マナス英雄叙事詩が果たした役割については証明することができない。管見の限り、アブドゥラフマノフ

は、スターリンへの書簡(1930 年)の中で、クルグズ人の共和国設置の必要性として、(1)クルグズ人は他の中央アジアの民族に比べて経済的に後進であり、共和国設置による財政拡大が必要であること、(2)中国と国境を接していること、そして大英帝国の拡大の危険に晒されていることを力説しているのみである⁽²⁴⁾。

こうしてみると、クルグズスタンの国家性と同叙事詩を結びつけるのには、ソ連崩壊による独立獲得という偶然を必然であるとする「操作」が見て取れる。

国家性に関してアカエフは、独自の見解を示している。すなわち、領土、住民、統治、独立の4つの要件の他に、国家イデオロギーを加えている⁽²⁵⁾。国家イデオロギーとは、マナス英雄叙事詩からアカエフが抽出したところの7つの教訓に一致する。これらの精神は、国家がなくなっても民族に連綿と息づいてきたとする。これは、長らく国家を有さなかったクルグズ人の国家性に正統性を与えるためのレトリックといえる。

アカエフが、エニセイ・クルグズ人と現代クルグズ人の連続性にこだわったのは、両者の断絶を認めてしまえば、クルグズ人内の、また国内の諸民族の団結・統一の理念をマナス英雄叙事詩から抽出することができないからだろう。

4 理念と現実の乖離

これまで見てきたように、アカエフは、マナス英雄叙事詩や歴史文献、さらに学者の言説に依拠して、クルグズスタンの国家としての正当性を主張した。そして、「伝説の」英雄を主人公とする叙事詩から、多民族社会の国民統合の理念、さらに民主主義の理念を唱えた。

現地の歴史学者は、クルグズスタンの国家性について、一般的に次のように考えている⁽²⁶⁾。

まず、国家の獲得には2通りの道があるとする。

(24) Dzhumanaliev, A., *Kyrgyzskaiia gosudarstvennost' v XX veke*, Bishkek: Ilim, 2003, pp.270-274.

(25) Akaev, Askar, *Kyrgyzskaiia gosudarstvennost' i narodnyi epos Manas*, Bishkek: Raritet, 2004, p.298.

(26) Beishembiev, E. i dr., *Vvedeniie v istoriiu kyrgyzskoi gosudarstvennost'*, Bishkek: Ilim, 2003, pp.236-237.

太子であったが、庶子であることが判明し、国を追われる。その後マナスに受け入れられ、「ページン」に遠征する (Karypkulov, A., *Manas Entsikolopediia Tom2*, Bishkek: Akyl, 1995, pp.80-83)。「ページン」が北京を指すのかは不明。アカエフは、自著『クルグズスタンの国家性と国民的英雄叙事詩マナス』においてクルグズ人と中国人は歴史上一度も戦ったことはないとして、「ページン=北京」説を否定している (Akaev, Askar, *Kyrgyzskaiia gosudarstvennost' i narodnyi epos Manas*, Bishkek: Raritet, 2004, p.235)。

(23) Akaev, Askar, *Kyrgyzskaiia gosudarstvennost' i narodnyi epos Manas*, Bishkek: Raritet, 2004, pp.241-242.

内戦または独立闘争である。クルグズスタンの歴史では、内戦として、19世紀にロシアに併合される前に繰り広げられたクルグズスタン北部での有力部族サルバグシュとブグの抗争が挙げられている。そして、部族間抗争の泥沼化を防いだのはロシアへの併合だったとする。

次に、1916年の対帝政ロシア蜂起を独立闘争とする。独立闘争がクルグズ人の殲滅に至らなかったのは1917年のロシア革命のおかげであり、革命を契機としてクルグズスタンの国家性の基礎が築かれたとする。

部族間抗争は、同国北部でのことであり、クルグズスタン全土に及んだわけではない。また、1916年の対帝政ロシア蜂起も北部に限定された。

このように、内戦も独立闘争も直接にはクルグズスタンの独立には至らなかった。したがって、革命とその後の境界画定によってクルグズスタンの国家性の基礎が作られたとする上述の見解は正しい。クルグズスタン国家の正当性はソ連、そしてその後継国家ロシアに拠っているといても過言ではないだろう。

クルグズスタン独立後に、ロシア人に代わりクルグズ人が政治に大きく進出したが、クルグズ人内の抗争が激化した。

独立後に、マナス英雄叙事詩とともに復権した民族文化に、サンジュラ（クルグズ人の口承民間系統図）があり、様々なサンジュラが編纂され、政治家も自己の権威を高めるために利用するようになった。一般の人々も、6または7代までの祖先の名を諳んじ、それができない者は「クル（奴隸）」出身として見なされる。

クルグズ人の遊牧民時代からの政治・軍事組織としての歴史的三大部族連合および下位の部族を簡略化して示したものが、右上の図である。

政治・軍事組織としての三大部族連合—オン・カナト（右翼）、ソル・カナト（左翼）、イチキリク（中央または「定住民」）—は、既に解体しているが、人々の帰属意識において今なお残っている。また、ほとんど全てのクルグズ人が、現在も自らが何れの部族に属しているかを知っており、系統・素性を重視している。

ただし、一般の人々のレベルでの相互扶助においては、部族は機能しておらず、さらに下位の氏族、しかも50家族単位の集団が相互扶助において意義を残している。

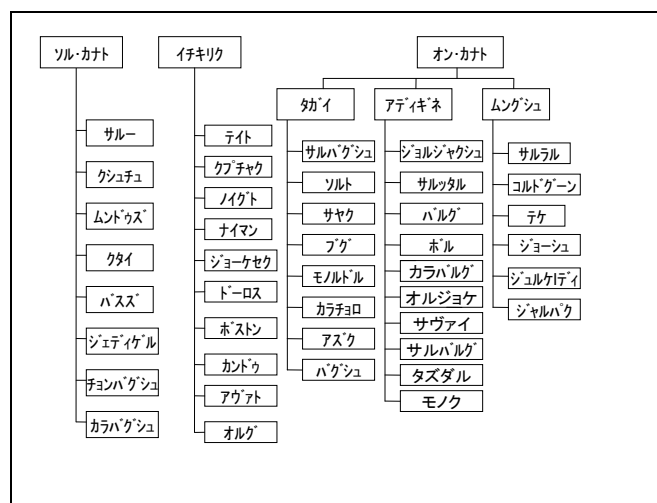


図 クルグズ人の三大部族連合と下位の部族

出所：Karataev, Oldzhobai, Kyrgyz Etnonimder Sözdüğü, Bishkek: Mega Mediia, 2003.を基に中西作成。

1993年に刊行されたアカエフの署名入りの著書『アスカル・アカエフ』では、サルバグシュ部族としてのアカエフの正統な血筋について述べられている⁽²⁷⁾。

1985年まで四半世紀にわたって共和国中央委員会第一書記であったT.ウスバリエフは、2003年の自著『われわれの時代と私の人生の諸事について』で、自己の部族的帰属をサルバグシュとし、彼の先祖がいかにクルグズ人に貢献してきたかを力説している⁽²⁸⁾。

このように政治家が自己の部族的帰属を明かす、または、明かさねばならないという事実は、クルグズスタンにおいて部族的要素が現在でも重要である

(27) Eshimkanov, Melic, Kanybek Imanaliev eds., Askar Akaev, Bishkek: Kyrgyzstan, 1993, pp.13-14. なお、アカエフの部族的帰属はサルバグシュである。

(28) Usabaliev, Turdakun, O nashem vremeni i o delakh moei zhizni, Bishkek: Sham, 2003, pp.4-49. なお、ウスバリエフは独立後、国会議員として政治活動が続けていたが、2005年の議会選挙において自己の選挙区（ナルン州コチコル）で最多の票を得ながらも「いずれの候補者にも反対」の票が過半数を占め、選挙自体が無効となった。

ことを示している。部族的要素は、ソ連によって形式的には否定されたが、コルホーズや末端の共産党組織においては、かえって利用された⁽²⁹⁾。独立後に、部族主義が際立った背景として、共和国科学アカデミーの Dzh. ジャヌシャリエフと V. プロスキフは、前述ウスバリエフの時代に、共産党組織の上層から末端までサルバグシュ部族による専有があったことを指摘する⁽³⁰⁾。

アカエフは、マナス英雄叙事詩から、民族協和の理念を引き出し、民族政策として「クルグズスタン—われらが共通の家」をスローガンとした。しかしながら、同国人口の3割を占める少数民族の間で「クルグズスタン人」としての意識が涵養されたかどうかは疑問である。まず、マナス英雄叙事詩はクルグズ人の民族文化であり、これを他民族が国民文化として享有することには無理がある。

同国第3の人口を持つロシア人の「祖国」ロシアへの出国傾向は顕著である。また、第2の人口を有し、クルグズスタン南部に多く居住するウズベク人との間ではソ連崩壊直前の1990年にクルグズ人との間で流血の民族間衝突が起きた。しかしながら、それ以降は目立つ民族紛争は起きていない。

クルグズスタンのウズベク人が、クルグズスタン国家の一員であることに違和感を持っていることは確かであるが、彼らがウズベキスタンに移住する動機は小さい。まず、隣接するウズベキスタンのフェルガナ地方は土地不足、人口過密である。また、より自由で土地の私有も確立しているクルグズスタンの方が暮らしやすいという事実がある。

同国4位の人口（約1%）を持ち、主にチュイ州の農村部に住むドゥンガン人（中国系ムスリム）はどうであろうか。ドゥンガン人は19世紀後半に、中国西北部で起きた騒乱によって中央アジア方面に逃れてきた。彼らは自らの民族的起源を「父はアラブ人、母は中国人（漢人）」と表現する。ドゥンガン人は、商売等で中国との結び付きは強いものの、言語

面での漢語との差異や宗教上の違いも含めて「祖国」中国へ再移住する動機は小さい。他方、クルグズスタンを祖国とも見なしておらず、「強いて言えば、祖国はソ連だ」という。

さて、独立後の国家理念として民主主義を掲げ、国際社会によっても「中央アジアの民主主義の孤島」との評価を受けたアカエフ政権であるが、1995年以降、権威主義的傾向を示し始め、北部と親族を重用する縁故主義に走った。2005年3月に14年間にわたって権力の座にあったアカエフは政変によって国外退去したが、受け入れ先はロシアであった。

他方、政変後の暫定政権をいち早く承認したのもロシアであり、政変後の安定化に大きな役割を果たした。

政変によって、北部出身のアカエフに代わり、南部出身のK. バキエフ大統領が就任したが、同大統領が権威主義化を示すと北部政治家を中心とする大規模政治集会が組織された。注目されるのは、政権だけでなく野党も政治集会の度にロシアへ赴き、「お伺い」を立てたことである。他方、2007年12月には、ロシアの政治技法を利用してバキエフは議会を掌握することに成功した⁽³¹⁾。

これらは、クルグズスタンの国家としての正当性が、いまだにソ連の後継国家ロシアに大きく依存していることを意味している。

他方で、クルグズ人政治家の行動規範は緩く、離合集散が激しい。このことは、大統領の権威主義化に歯止めをかける役割を果たすとともに、その逆もありうることを示しており、クルグズスタンの政情の流動性の一因ともなっている。政治家の行動規範の緩さは、離合集散の激しかった遊牧民の伝統によると考えることもできる。それ以上に、帝政ロシア・ソ連以前に、クルグズ人は統治者を頂点とした国家を形成してこなかった点大きい。

(29) オリヴィエ・ロワ（斎藤かぐみ訳）『現代中央アジア』（白水社、2007年）21—22頁。

(30) Dzhunushaliev, Dzhengish, Vladimir Ploskikh, “Traibalizm i Problemy Razvitiia Kyrgyzstana”, Tsentral’naia Aziia i Kavkaz, 3(9), 2000, p.153.

(31) バキエフ大統領によるロシアの政治技法の利用については、拙稿「キルギス共和国初の比例代表制に基づく議会選挙—南北の地域軸と政治技術の利用—」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要第8号（2008年2月）を参照のこと。

おわりに

「マナス英雄叙事詩 1000 年」、「クルグズスタン国家性 2200 年」における数字については、アカエフによる「操作」が見られる。物理学者・数学者のアカエフによる「数字」による手法は、旧ソ連の独立国家群のうち、トルコ語圏の指導者にとっての手本となった。

アカエフの手法を歴史や民族文化の「捏造」とし、ソ連時代から変わらない民族文化の政治利用だとする見方もあるが、捏造というよりは発見または解釈と呼んだ方が正しいであろう。

クルグズ人の歴史は、絶えず、より強力な遊牧集団や国家に囲まれながら、服従と抵抗の歴史であった。外敵から身を守るには、集団内の団結と統一が不可欠であり、このような環境にあったクルグズ人は、ラドロフが指摘したように、「われわれ意識」が比較的堅固といえる。しかし、それは、クルグズ人という単位ではなく、部族単位でのことであった。

先に、クルグズスタンの特徴として、実在する民族的英雄の欠如、強国としての歴史の欠如、人工国家性を挙げた。

他の中央アジア諸国では、実在の、しかし現在の民族とは関係の少ない民族的英雄を歴史から引き出し、また、大統領自らが強権によって独立後の「建国の父」となる意志を持った。例えば、ウズベキスタンは、ティムール帝国を国家の基礎としているが、実際にはウズベク人とティムール朝との関係は敵対関係にあったことは周知の事実である。同国の大統領 I. カリモフは終身大統領の道を開いている。

他方、王朝を持たなかったクルグズ人には、権威主義を許さない土壌がある。マナス英雄叙事詩にも、マナスの子孫の繁栄は見られない。こうした土壌の上に、ソ連時代に端を発する国家性、言いかえれば統治機構が導入され、独立に至った。

「建国の父」を目指したであろうアカエフは、2005 年の政変によって半ば国外追放の憂き目にあった。マナス英雄叙事詩を梃子に、クルグズ人の統一と団結、さらには国民統合を目指そうとしたアカエフは、理想と現実—国家の人工的性格、部族意識や地域意識の強さ、政治家の行動規範の緩さ等—のギャップに直面したのであった。

(Received: May 31, 2008)

(Issued in internet Edition: July 1, 2008)